

火野葦平「土と兵隊」の同時代的意義

——日中戦争期における文学（者）の位置

松本和也

I

昭和一〇年代の文学（史）研究、ことに日中開戦後の文学場を問題化しようとする場合、キーパーソンの一人は、間違いなく火野葦平（一九〇七—一九六〇）である。その最大のメルクマールは、「糞尿譚」（『文学会議』昭一二・一〇）による芥川賞受賞後の、戦場にいる文学者からのメッセージ¹「麦と兵隊」（『改造』昭一三・八）である。ベストセラーとなった『麦と兵隊』（改造社、昭一三）は、文学場内／外に大きな衝撃を与え、昭和一〇年代の文学場を方向づけることにもなった。こうした視座から、近年は研究対象となることも増えてきた火野葦平ではあるが、その重要性にみあつた研究が展開されているとはいいいがたい。

そこで本稿では、「麦と兵隊」、「土と兵隊」、「花と兵隊」から成る「兵隊三部作」のうち、「土と兵隊」に注目する。「土と兵隊」は、現実世界の時間軸からいえば「麦と兵隊」に先立つもので、火野葦平自身が分隊長として参戦した杭州湾敵前上陸前後の出来

事を、弟宛の書簡七通に構成した戦争文学である。その執筆企図については、火野葦平自身が、後年次のように語っている。

「土と兵隊」を書いているときは、従軍ペン部隊が殺到しているときで、勢い原稿を書く時間も、その閑々だつた。「土と兵隊」は「麦と兵隊」以上に骨が折れた。「麦と兵隊」の方は、はじめからなにか書くための準備という心がまえがあつたので、日記も割合にきちんとしていたが、「土と兵隊」の杭州敵前上陸以後は、まったく泥んこの中で戦闘しながらだつたので、日記もほんのメモ程度、その手帳は汗と泥とでよごれ、糸も切れかかつてボロボロになつていた。鉛筆の字はすっかり消えている。それを整理按配することは容易ではなかつた。わからないところを訊ねたい私の兵隊たちは杭州にいる。結局、自分の記憶だけがたよりで、「麦と兵隊」のようにスムーズにペンが進まなかつた。²

本稿では、同時代読者にとつて「麦と兵隊」との比較が前提となる中で発表された「土と兵隊」（『文藝春秋』昭一三・一一）について、文学場内／外における受容を同時代評や単行本広告の分

析から検証していきたい。

それに先立ち、これまでの「土と兵隊」研究史を素描し、また、「土と兵隊」受容の前提ともなる「麦と兵隊」同時代受容の地平・モードについても整理しておく。

「土と兵隊」研究は、イデオロギー的裁断によらず、火野葦平「土と兵隊」・「麦と兵隊」を研究対象として（再）設定するところから出発した。その後、削除箇所に関する本文の検討は進んだものの、論及される機会は少なかった。近年の顕著な傾向としては、形式への着目があげられる。「麦と兵隊」と「土と兵隊」を併せて論じる池田浩士に、次の指摘がある。

『麦と兵隊』の日記体と、『土と兵隊』の書簡体は、いずれも、作者が戦地の現実を真実味をこめて伝えるのに適した表現形式であるばかりでなく、銃後の答えを思い描きながら、あるいは先取りしながら、銃後との対話を重ねるための、きわめて効果的なスタイルでもある。この表現形式を通して、火野葦平は、兵隊作家である自分に読者が期待するものを、銃後に送り届けたのだ⁴。

ここで池田は、二作品の差異と通底性を、表現形式とその対読者戦略に見出している。また、「兵隊三部作」を分析する成田龍一も、『土と兵隊』に関して、『出征した火野が弟に宛てた書翰という形式』と『火野は戦場と戦闘の当事者』だという条件を重んじ、次のように論じている。

書翰も日記も個人の言説という形式をもち、リアリティを喚起しやすいが、戦闘の当事者としては「手紙を書く」ということがいちばん自然な行為だろう。当事者としては戦闘に

専念せねばならず、戦闘の記述は二次的な行為となる。しかし、リアリティをもつ戦闘の叙述は、書翰形式ならば自然に感じられ、書翰の受信人が肉親であればいつそう読者の抵抗感がなくなる⁵。

その上で成田は、『偶然的・個別的であった分隊の結成が、同様に偶然的・個別的でありながら共同である戦場Ⅱ戦闘の体験をへて、手応えのある必然的な「高いもの」へと昂進して』いき、それが『祖国』とむすびつけられていく『回路を析出し、弟の役を読者がひきうけることで、『土と兵隊』は『読者をも巻き込んだ体験』と化するのだと論じる。さらには、そうした『土と兵隊』の形式によってもたらされた『戦場の絆』は、『日本国内（銃後）へと拡大され、狭義の戦場をはなれ、前線／銃後をおおう戦場の絆』に変じていくのだとして、その社会的機能にまで論及し、『麦と兵隊』『土と兵隊』で探究された戦場の思考と戦場の絆とは一九三〇年代の思考となる⁶と結論づけている。

これらの研究は、『麦と兵隊』と『土と兵隊』が、銃後の読者をまきこみつつナシヨナリズムの醸成に関わっていくメカニズムを、小説の形式を手掛かりに明らかにしてきたことになる。

他方、増田周子は『土と兵隊』の執筆資料である、『清水隊江南戦記（草稿）』・『土と兵隊 創作ノート』と『土と兵隊』との『比較検討』によって、同作における『火野葦平の記録と作品表象の問題』を具体的に検討している⁷。

ただし、『土と兵隊』先行研究においては、作品の書き手サイドからの生成過程や、その帰結としての言語表現は検討対象とされながらも、『土と兵隊』の同時代受容やその社会的機能につい

ての検証はいまだなされていらない。

「麦と兵隊」をめぐる同時代受容の地平・モードについては、すでに拙論で検討を試みた。その前提としては、日中開戦後の報告文学およびそれを取り巻く批評言説——報告文学言説によつて再編成された文学場について、『悲風千里』（中央公論社、昭一二）を上梓した尾崎士郎に即した事例分析から、『①文学者として、②従軍体験に即して、③「当事者性」を重視した上で、④自身の体質・個性（「人間（性）」）をも前面に出したもので、⑤（戦場との）体験と執筆との「距離」が問題にされていた』ことを明らかにした上で、次のように論じた。

時局を関数とした文学者・作品の構造的な近接——文学者は時局に対する明確な姿勢をもつべきで、それを作品にも体現することで、作品が作家の《心》に直結された反映と化していく事態——こそが、事実性／芸術性、体験・「当事者性」・「人間（性）」／「距離」などを主な論点として（再）編成されてきた報告文学言説の帰結なのだ。

従つて、『戦場を体験した「当事者性」に即して戦争を書けば、社会性は担保されるものの、文学性は高く評価されにくい。逆に、戦場から「距離」をおき、あるいは体験のないままに戦争を書けば、文学性は高く評価され得るものの、社会性からは乖離してしまいがち』だという『日中戦争下における文学者の抱えたジレンマ』を克服することは、いかにも困難だった。そうした状況下で発表された火野葦平「麦と兵隊」とは、右の歴史的な条件を一挙にクリアしてみせた、時代の表徴たるにふさわしい一作だった。

実に多くの同時代評にとりあげられた「麦と兵隊」だが、拙論

ではそれらの論点を集約した同時代評・間宮茂輔「文芸時評（一）戦争文学の出現」（『中外商業新報』昭一三・七・三〇）に即して、次のように同時代受容の地平・モードを指摘しておいた。

書かれるモチーフ（戦場）が言語を絶するものでありながら読者にも実感可能で（①）、それを書き手自身が戦場にいるという事実が支え（②）、前作からの成長した筆法により（③）、リアリティが醸しだされていく（④）。さらに、解釈を排した観察が徹底され（⑤⑦）、技巧よりむしろ素朴な筆致を特徴とする言語表現（⑥）——これが、同時代の一家の眼に映った「麦と兵隊」の相貌である。

次節以降、「麦と兵隊」現象とでも称すべき大好評のうちに発表された、「土と兵隊」が、「麦と兵隊」と比較されながら、どのように位置づけられいったかを検証していく。

II

「麦と兵隊」以降の、火野葦平への高い注目度を示すように、次に引く、無署名「展望台 火野葦平の第二巨弾」（『読売新聞』昭一三・一〇・一二夕）のような記事が出る。

某書房が火野葦平こと玉井軍曹に書下し長篇「戦塵」の出版を契約したといふ快ニュースも伝はつてゐるが、それよりも一足先に「文藝春秋」に「土と兵隊」（百七十枚）を書き送つた。麦と兵隊から土と兵隊へ。巨弾に次ぐに巨弾を以てする彼の精力には驚くべきものがある。この分だと当分読者も批評家も不自由すまい。火野葦平、万歳！（二面）

実際、数日後には、「土と兵隊」を前面に押し出した『文藝春秋』広告（『東京日日新聞』昭一三・一〇・一六）が掲載される。《麦と兵隊を凌ぐ傑作》、《堂々二百枚の巨篇!!》といった見出しの他に、次のような紹介文も付されている。

◇芥川賞受賞火野葦平の従軍三部作の第一部成り文藝春秋誌上に発表さる

◇名作「麦と兵隊」を発表して洛陽の紙価を高からしめた火野葦平再びこの巨篇を提げて「麦と兵隊」の名声を圧倒せんとす!!

◇報道部員としてでなく一分隊長玉井勝則としてトーチカ攻撃に、クリーク渡河に江南戦線を鬼神の如く馳駆する壮烈さ!!更に中支の泥濘の中を往く黙々たる皇軍将士の崇高さ!!眼前に彷彿たり!!

◇本篇を書き上げた火野葦平は原隊に復帰すると共に勇躍○
○攻略の第一線に立つた!!朝には熱血の文を綴り夕には戎衣を腥々たる戦場の風に靡かせる!!これぞ真に事変最高の戦争文学だ。(二二面)

翌日には、その別バージョンとして広告「火野葦平の土と兵隊」（『東京朝日新聞』昭一三・一〇・一七）が掲載され、そこで「土と兵隊」は《麦と兵隊を凌ぐ傑作! 堂々二百枚の巨弾!!》、《麦と兵隊で全読書界を席卷した火野葦平は更に全精魂を籠めて土と兵隊を書き上げ、心置きなく、直に南支攻略の第一線に出勤した!! 朝にペンをとり夕に十字砲火に身を曝す! 而も描くは事変最大の激戦記!! 読め! 硝煙の中に盛り上る魂の記録を!!》(一面)と紹介される。

以下、火野葦平「土と兵隊」(『文藝春秋』昭一三・一〇)の同時代評を検証していく。

まずは、年次総括にあたる「昭和十三年文壇の人・作品・評論」(『早稲田文学』昭一三・一二)で、「土と兵隊」が論及された際の、語られ方を確認しておきたい。岡田三郎「小説作品について」では、《火野葦平氏の「麦と兵隊」「土と兵隊」上田廣氏の「黄塵」も忘れ得ないものだ》(七頁)、細竹源吉「寸評」では《火野葦平氏の「麦と兵隊」「土と兵隊」は、狭い文壇の問題以上に今日では国民的な注視的となつて、本年最大の収穫を成した》(一〇頁)、寺岡峰夫「報告文学その他」では《戦地からの報告文学がジャーナリズムを賑はせたが、火野葦平の「麦と兵隊」及び「土と兵隊」が何といつても圧巻だつた》(一一頁)、田邊耕一郎「本年文壇の人・作品・評論」では《火野葦平氏の「麦と兵隊」や「土と兵隊」は、文学の純粹な意味において事変が生んだ今年最高の収穫だつた》(二三頁)と、それぞれ評されているが、火野葦平・「麦と兵隊」・「土と兵隊」というキーワードを連ね、抽象的な言辭で絶賛するという点で、著しい近似は明らかである。

もちろん、両作の発表時期が近かつたせいもあるが、火野葦平による戦場からの報告文学ルポルタージュとして「麦と兵隊」と「土と兵隊」は並置、比較されてもいった。比較に及ばない場合でも、唾鳥「大波小波 表現の相違」(『都新聞』昭一三・一一・一)のように、「《麦と兵隊》と「土と兵隊」と、どつちがいいか、どつちが感動をよびおこすか」と問題提起がなされ、賛否は示さずとも、《ただ、どつちもやつぱり、戦争をしてゐる兵隊そのひとの書いた文章といふ感がふかい》(二面)と、意識自体はされていく。

「土と兵隊」同時代評における第一の論点は、日中開戦以降の報告文学（言説）同様、書き手が実際に現場を経験しているという了解に基づき、当事者性である。

《ぐいぐいと文句なしにほくをその世界にひきずりこんでゆく力「土と兵隊」はたしかにそれをもつてゐる》という「土と兵隊」について（上）（『信濃毎日新聞』昭一三・一〇・二七）の上田進は、《その力》の発生源を《作者火野君が、命をかけて戦争の場をつきぬけてきた》（四面）とくにみている。森山啓も「文芸時評【二】「土と兵隊」と純文学」（『国民新聞』昭一三・一〇・三〇）で、《作者自身が分隊長として部下をもつた体験の内面から書いてゐる》点を以て《それだけに一層自然だ》（六面）と「土と兵隊」を評している。火野の創作事情に即して当事者性を強調したのは、「文芸時評（一）我流文芸観」（『中外商業新報』昭一三・一一・一）の宇野浩二で、次のように論評している。

「糞尿譚」は褒貶相半したが、「麦と兵隊」は圧倒的に好評であつた。恐らく今度の「土と兵隊」は「麦と兵隊」以上に好評であらう。それは、一口にいふと、「麦と兵隊」は中に切迫詰つた場面が十分に書かれてはゐるが、筆者の立場が報道部員であり、「土と兵隊」では、筆者が一人の兵隊となつてゐるので、読む者に戦争其ものの実感が生々しく迫つてゐるからである。

つづいて宇野は「麦と兵隊」と対比しつつ、しかし《麦と兵隊》「土と兵隊」——共に戦争文学として、これ以上の物は先づ当分現れないであらう》（五面）と、両作を並置する。三戸斌「創作月評」（『文藝』昭一三・一二）においても、《この作品では、

刹那々に死を覚悟してゐる戦闘参加者の気持の陰翳を描いてゐるところ》に《前作とはちがつた特色》を見出し、《それだけ作者は戦争その者を味得してゐるからであらう》と当事者性を強調した上で、《今月では最も読みこたへのあつた作品》（二二四—二二五頁）だと顕揚していく。

ここに交差するのが、「土と兵隊」を報告文学とみなす言表である。《火野葦平氏の「土と兵隊」を読み、感動した》という「記録文芸の現代的意義」「土と兵隊」を礼讃する」（『早稲田大学新聞』昭一三・一一・二）の岡澤秀虎は、《今月の諸雑誌には「ペン部隊」の人々の書いた多くの従軍通信が掲載されてゐるがそのすべてをもつてしても「土と兵隊」一篇に及ばない》（五面）と断じているが、その根拠は、上田進「土と兵隊」について（中）（『信濃毎日新聞』昭一三・一〇・二八）が示した通り、「土と兵隊」が《身をもつて戦争を経験した行動者の記録》であり、《その点、「土と兵隊」は他の従軍記と質的な違ひをもつてゐる》（六面）とくに求められる。より端的な言表としては、高沖陽造が「文芸時評『土と兵隊』と『第八路軍従軍記』」（『日本学藝新聞』昭一三・一一・一）で《文学的感興といふよりはニュース的感興といつた方がよいほど》（四面）と、伊藤整が「文芸時評（一）文学の持つ力」（『信濃毎日新聞』昭一三・一一・三）で《これが戦争だ、これが戦争といふものの実体だと、読みながら幾度かうなづかねばならぬぐる、見事な記録》（四面）だと評し、「土と兵隊」を当事者による記録と位置づけていく。

それゆえに「土と兵隊」は、銃後の読者にも戦場を幻視させるような読書体験を提供していく。たとえば本多顯彰は、「文芸時

評【2】「土と兵隊」の真实性」（『読売新聞』昭一三・一〇・二八夕）において次のような感想をもらしている。

「土と兵隊」特にその中でも杭州湾敵前上陸のところなどは、面白かつたとか、よく描けてみるとかいつては相済まないやうな気がする。（略）そしてほつと息いれる時、「兵隊さん、よくやつてくれたなあ」と肩を叩きたく思ひ、熱い涙がふり落ちるだけだ。批評など、少くとも今は、入り込む余地はない。（二面）

こうした心情については、無署名「文藝春秋」（『三田文学』昭一三・一二）において、『この作品が、現在、日本が戦つてゐる戦争について書かれたものであり、又実際、戦争に従事してゐる兵士の手記である故に我々、日本人である読者は、その作品の背後にある現実に対する好奇心の爲めに、冷静な眼を持つて、この作品に向ふ事は困難であり、いやむしろ批評することは不可能なのだ』（二九頁）と解説されている通りとみてよいだろう。

こうした「土と兵隊」が国民にもたらす感動は、当事者性に連なる第二の論点、ヒューマニズムに拠る。森山啓「文芸時評」【二】「土と兵隊」と純文学」（『国民新聞』昭一三・一〇・三〇）に、『人が、民族感情の中における「ヒューマニズム」「兵隊の人情」と呼んでゐるところのものが、この作品（「土と兵隊」／引用者注）の体験記録性と共に文学上の特色をなしている』（六面）と言表されているのがその代表である。本多顯彰「文芸時評【一】圧倒的な報告文学」（『読売新聞』昭一三・一〇・二六夕）における『そこ（「麦と兵隊」と「土と兵隊」／引用者注）では、作者の文学的素質と文学的鍛錬と、砲火の中にあつてすらも失はれな

い文学的良心とが強く物を言つてゐる』（二面）という言葉はその変奏であるし、より素朴に換言すれば、「文芸時評（四）死ぬる覚悟」（『東京日日新聞』昭一三・一一・五）の大熊信行による、『国のために死ぬる覚悟をきめた日本兵の心、——この心をちよつとでも離れて『麦と兵隊』も「土と兵隊』もない』、『いかなる従軍記も現地報告も及ばざるゆゑんはこゝにある』（五面）といった言表になる。武田麟太郎も「小説「土と兵隊」——文芸時評——」（『文藝春秋』昭一三・一二）で、『卑近な日常性を起点に、非常な場合の兵隊と云ふ大衆に触れようとして、ヒューマニズムの匂ひを旺に撒布してゐるのは注目すべき』（三二二頁）と評しているし、田邊耕一郎も「戦争とヒューマニズム」（『早稲田文学』昭一四・三）で『私は火野葦平氏の「土と兵隊」をよんで、その高揚された戦ひにおける人間の純粹感情の豊かさや美しさに心をうたれた』（二六頁）と述べている。その田邊は「火野葦平の文学」（『中外商業新報』昭一三・一二・二五）では、『麦と兵隊』「土と兵隊」などの一聯の火野葦平氏の文学は、たしかに傑出した戦争文学で、深く敬意を感じると同時に、これらの文学にある人間の美しい純粹感情は、素質として私は好き』（五頁）だと述べたが、戦争文学、ヒューマニズムという二つの論点を重ねた同時代評として、次に引く北岡史郎「文壇時評」（『若草』昭一三・一二）がある。

「麦と兵隊」の記録のもつ文学的感動と、「土と兵隊」の小説のもつ文学的感動と、いづれもこれは最高の立派な戦争文学である。そして、欧洲大戦のときの塹壕から生れたドルヂュレスの「木の十字架」やルマルクの「西部戦線異状

し」やレンの「戦争」などにつらなる世界の戦争文学の連峰としてのレベルの高さと、純粹さと、身をもつて表現した文学の共通にもつ人間の誠実や大きな愛が感じられる。(六六頁)

このように、「土と兵隊」は(戦争)文学・芸術としても高く評価され、しかも、その際には「麦と兵隊」と比較されていく。無署名「新潮評論 時局・芸術・文芸」(『新潮』昭一三・一二)では、『麦と兵隊』からみると「土と兵隊」は、芸術作品として遙かに良くまとまつてゐるがゆえに、『この年若い作家の作品は、他の有名無名の文壇人がこれまでに書いた一切の事変物に比べて格段の効果を示し、広範囲の読者の心に深い感銘を与へた』(一五一頁)と評される。神田鶴平も「創作時評」(『新潮』昭一三・一二)で、『土と兵隊』は悠然としてゐて、重厚味があり、はるかに芸術的完成に近づいてゐる、『前作一般に比して作品の緊密性を増し、整つてゐるのが、この作の長所だ』(二三〇頁)として、文学・芸術(性)という観点から「土と兵隊」を顕揚していく。両作品の賛否は割れるものの、これが第三の論点をなす。二作を対比した、阿Z「大波小波 葦平の力作」(『都新聞』昭一三・一〇・二七)を次に引いておく。

▼もし「土と兵隊」を「麦と兵隊」より佳しとするならば、その「小説的」である点であり、「麦と兵隊」より、印象稀薄とするならば、「記録」でありながら、「記録」が潤色化されてゐる点である。(略)「土と兵隊」も驚嘆すべき作品である。人の肺腑を抉る文字である。(一面)

このように、記録(性)／虚構(性)を「麦と兵隊」／「土と

兵隊」両作品の対照的な特徴として見出す同時代評は多い。『土と兵隊』は日本を出る戦中からの手紙に描写が始まり、後になると日記体の長い手紙になつてゐる。点を以て『筋そのもの、自然な進行が最初から読者の注意を動的に捕へる』と指摘する「文芸時評(3) 戦争の真実」(『都新聞』昭一三・一一・二)の板垣直子は、次のようにして二作品の特徴を整理している。

第二作(「土と兵隊」／引用者注)では意識的に小説的構成が企てられてゐる。それは明らかに、戦争文学としては前者(「麦と兵隊」／引用者注)より有利である。前作は陣中で書かれた儘を発表したのであるが、第二作はゆつくり手を入れたといふことである。(略)二つの作品の優劣を議論する人もあるようであるが、内容は同じく優れてゐて、形式は後者の方が小説らしく整つてゐる。(一面)

同様の特徴を『戦争文学の散文形式』という観点から整理したのは、瀬沼茂樹「戦争文学の検討(二)」(『中外商業新報』昭一三・一一・一九)で、次のように論じている。

陣中匆忙裡、作家が戦争の体験を伝達する形式としては、書翰体と日記体とが最も自然な形式であるからである。火野葦平氏の二作が一つは書翰体で、一つは日記体で、描かれたことも偶然ではないのである。しかも「土と兵隊」が「麦と兵隊」に優れてゐる点は、作者の体験の痛切さを異にし、またその驚きの生々しさにあるのであらうが、またこの文学形式の差が生んだものともいへる。日記体における回顧性と、書翰体における現在性との差とも考へられる。(五面)

となると、日記体「麦と兵隊」＝記録(性)／書簡体「土と兵

隊」＝虚構(性)というのは、あくまで両者を対比した場合の特徴で、そのどちらを重視するかによって微妙な評価の差異が生じてくる。たとえば、上田進は「土と兵隊」について(下)「(信濃毎日新聞)昭一三・一〇・二九)で、『麦と兵隊』にくらべて、『土と兵隊』は非常に小説に近づいてゐる」がゆえに『土と兵隊』の方がおもしろくは読めるけれど、追つてくる力は「麦と兵隊」に比べて、やや直接的ではない(五面)と評しているし、北岡史郎も「文壇時評」(『若草』昭一三・一二)で『土と兵隊』で小説的構想や表現をとつてゐることに、そこにみじんの嘘はなくとも小説化さうとしてゐる意識がやや気になる(六六頁)と、虚構(性)を難じている。他方、『恐らくは、前作よりも「土と兵隊」の方がより多く人々を直接に感動させるだらう』というのは「小説「土と兵隊」——文芸時評——」(『文藝春秋』昭一三・一二)の武田麟太郎で、『その形式もまた前作より「ぐんと小説」になつてゐる』ところに注目し、『多くの観戦記がとまどつて据ゑ方を自失した小説家の「眼」が、ここでは現実との間に密接な相互依拠の位置を保つて、一切の現象はそこから発し、そこへ収められるやうなメカニズムが形成されてゐた』(三二二頁)と評して、対象を『小説家の「眼」』を通して形式化(虚構化)した、小説としての構成を高く評価している。

以上を総合しつつ、第四の論点として火野葦平による戦争文学(『麦と兵隊』『土と兵隊』)を、文学領域にとどまらない社会的意義として意味づけしていく言表がみられる。《今度の事変を扱つたものの中で、最も名声を高め且つ普及した火野氏の戦争文学が、通俗ものではなくて、純文学に属してゐること》を『面白い事実』

として注目する板垣直子は、「槍騎兵 土と兵隊」(『東京朝日新聞』昭一三・一〇・二六)において『これは文学史上特記されるべきであるし、また、純文学の社会性と連関しても意味深い問題を投げてゐる』(七面)と、戦時下においてその存在意義を問われていた純文学が、実は社会性をもち得るという実例として、火野葦平の戦争文学を意味づけている。板垣直子は「文芸時評」(3)『戦争の真実』(『都新聞』昭一三・一一・一二)でも、『武漢三都占領の公表をき、ながらこれをかいてゐるが、純文学系統の偉大な二つの戦争文学をえたことも、国の大きな喜びでなければならぬ』(一面)と、文学領域の成果を国家レベルへと媒介しながら、その意義を強調している。《▼それにしても戦争についての認識を深く人々の頭に印刻するものは、つひに文学以外にはないことも痛感される》という阿Z「大波小波 葦平の力作」(『都新聞』昭一三・一〇・二七)においても、『かう云ふ時局下で文学の価値がはつきり示されたことは、文学者が誇りとしてもい、ことである』(一面)と言明されるが、その契機となつてゐるのは、『火野葦平の戦争文学である。《事変ジャーナリズムの全分野を通じて、火野葦平の文学ほど国民の心に響へたものがないといふことは、いまさらながら文学の力を思はしめるものだ》とその影響力に言及する大熊信行は、「文芸時評」(五)一つの正当派』(『東京日日新聞』昭一三・一一・六)で、次のように論評している。

『麦と兵隊』『土と兵隊』の一つの価値が生死の境にあつて闘ひつ、書かれたといふ事実とその形式にあるのはいふまでもない。しかしそれが闘ひつ、書かれつ、あるあひだに銃後の国民に発表されつ、あるといふ文学形式そのものに、いか

に重大な国民的意義があるかをおもはなければならぬ。(五面)

ここで大熊は、書き手の当事者性や小説の形式にも論及しながら、それが読者『《銃後の国民》』に果たした意味作用をもって『国民的意義』を強調している。あるいは、川端康成は「文芸時評(4) 葦平の「土と兵隊」(『東京朝日新聞』昭一三・一一・六)において、『麦と兵隊』や「土と兵隊」は、戦争のなかから戦後の生活や文学にも、強い暗示を投げてゐる節がある(七面)と、簡潔に、しかしやはり火野葦平の戦争文学がもつ広範な影響力に論及する。「土と兵隊」を『麦と兵隊』よりも傑れてゐる』と判じるR「公論私論」(『早稲田文学』昭一三・一二)においても、『最も重要な点は、かういふ記録文芸が今や日本文芸に極めて必要であり、大きな歴史的意義を持つ』(三〇頁)点が強調されていくし、北岡史郎も「文壇時評」(『若草』昭一三・一二)で次のように論じる。

この月の文壇で、最大の収穫は、なんといつても火野葦平の第二作「土と兵隊」(文藝春秋)であつた。この月の圧巻であるばかりでなく、前作の「麦と兵隊」以上に、ことしの文壇を通じて、文学がこの事変の大きな歴史的意義に協力し、体得して、それを純粋な文学的表現において高く開花させた意味深い大収穫といふことができる。(六六頁)

こうした同時代評の延長線上に、雷鳥「大波小波 一年間の変化」(『都新聞』昭一三・一二・二四)が示す、次のような文学場の動向も描きだされるだろう。

▼当局者と文学者との会談は、近頃の眼立つ現象の一つで

あるが文学は確かに一般からも重要視されて来てゐる傾向にある。／▼火野葦平の出現や従軍作家たちの仕事や農民作家たちの仕事がいふ傾向を持ち来ず契機になつたことは認めねばならぬ。今日では作家たちは、殆ど「文学の力」を信じてゐるやうである。(二面)

事実、「麦と兵隊」とその影響力が、農民文学懇話会や従軍ペン部隊の契機となつたのだが、それは別言すれば、国家権力によつて『文学の力』が時局において有用だと判じられたことの帰結でもあり、その中心には、戦争文学の書き手である火野葦平が位置している。もとより、小説「麦と兵隊」の発表がその端緒には違いないが、同作が世に出て後、単行本として売れ続け、翻訳、舞台化、といったメディア・ミックス的展開をしているさなか、より当事者性を増した「土と兵隊」が発表され、しかも優れた戦争文学だという評価と併せて、文学(者)の社会的意義として意味づけられていったことが、当局が文学(者)への関心を示し始めた時機とも重なり、重要な役割を果たしたと思われる。

従つて、『葦平の「土と兵隊」が相変わらず、問題のない文壇の随一の話題となつてゐるやうだ』という無署名「六号雑記」(『三田文学』昭一三・一二)において、『土と兵隊』が、戦記文学として相当なものであることは、もちろん認めなければならぬ。しかし、戦争文学の最高峰かどうかは、もつと冷静に考へてい、(一五五頁)という批判はあり得るとしても、「土と兵隊」がもつ『文学の力』はこの時すでに、文学場をこえ、より広いシーンにおいて、社会的・国民的意義を果たしていたのだ。

もちろん、文学場においても「麦と兵隊」と「土と兵隊」は、

既存の枠組みを打ち破る画期的な作品として衝撃を与えていった。《麦と兵隊》「土と兵隊」についてはあらゆる批評家が、筆を揃へてほめた。その理由を「文芸時評（3）戦争小説と従軍記」（『中外商業新報』昭一三・一二・六）の木々高太郎は、次のようにして三点にまとめている。

第一の理由は、前記の大衆の満足を代表した一つの大きな満
足から出たものである^マとして第二の理由は、戦争に従ひつ、
ある苦楚のうちから、生命を砲火に曝らしながら書いてゐる
筆者に対する尊敬である。この尊敬は文学以外のものである。
〔略〕第三の理由は、純文学は私小説しかないと言ふ過去十
数年の日本壇特殊の常識で育てられて来た批評家が、私小
説、即ち身辺雑事のうちに、最も偉大なる私小説に打たれて
了つたことに起因する。／戦争小説は、今や我々に、この三
つの重大な点の自覚を齎したのである。（五面）

総じて、「麦と兵隊」を前提とした「土と兵隊」の登場は、書
き手の当事者性やヒューマニズムの裏づけをもつ戦争文学の傑作
にして、国内外の社会情勢との相関関係において《文学の力》
を示す意義を果たしつつ、しかも文学場においては《偉大なる私
小説》（木々高太郎「文芸時評（4）第二の大きな問題」、『中外
商業新報』昭一三・一二・七、五面）でもあり、多方面に影響力
を発揮／承認されつつ、文字通りの画期を成したのでだ。

III

本節では、単行本化『土と兵隊』（改造社、昭一三・一一）を

めぐる新聞広告を、特にそこに添えられた言葉に注目しながら分
析していく。刊行に先立ち、次に引く「土と兵隊」発行延期に
つき（『東京朝日新聞』昭一三・一一・一五）が掲載される。

「単行本は絶対にこの稿本によつてくれ。十一月八日、広東
にて 葦平」と雑誌に登載されたものを全面的に朱書訂正し
た原稿を送つて来た。その為め我社は印刷した幾十万冊の単
行本を寸断し、茲に改めて再印刷するの犠牲を止むなくされ
ました。それが為め十一月廿日発売の予定を十二月一日に変
更延期しました。この間の事情を諒とせられ期待を願ひます。
（一一面）

これは、事務連絡であると同時に、今なお戦場にいる書き手
火野葦平の存在感を『土と兵隊』に備給するとともに、それが慌
ただしい戦場で書かれたものであることを想像させもする。もと
より、最後まで作品に手を入れる火野の作家性も強調される。

予告通りの発売日には、新聞各紙に広告が掲載される。ここで
は、一面に掲出された、広告「火野葦平著 土と兵隊」（『東京朝
日新聞』昭一三・一二・一）を引いておく。

出た!!! 『麦と兵隊』の姉妹篇全国一斉本日発売

前線銃後を感激と興奮の渦にまきこんだ世界的巨篇『麦と兵
隊』!! ——その姉妹篇が出た!!!

昭和十二年十一月五日、朝露深き杭州湾に決行された戦史未
曾有の敵前上陸の凄絶な光景を序幕として、そこに涯なくつ
らなりつづく十字砲火に曝された泥濘の悪路を馬は横倒しに
なり兵はクリークに汙りこみ、昼となく夜となく全身血と泥
の中に眼だけを光らせた皇軍精銳の、硝煙弾雨を衝いて進む

大進軍だ!!

「今日も生きてゐた。また書ける」と、作者は難行軍に明け敵襲に暮れる其日々々を文学者としての精根を傾け尽して描きつづけ写しつづけ、つひにこの驚くべき名作は完成された!!! (一面)

『麦と兵隊』との連続性を強調しながら、直接戦闘に関わつたわつた書き手⇨火野葦平が、文学者としてその渦中で書いた作品であることが強調された宣伝文となつてゐる。また、左端のスペースでは『麦と兵隊』についても、『日本で一番よく売れる本!』どこまで売れるかはしてしがない!!』という文言とともに『大増刷出来』とアピールされている。

広告「火野葦平著 土と兵隊」(『東京朝日新聞』昭一三・二二七)では、『売行の最高記録、姉妹篇「麦」と両々並進 見よ歴史的名作の此物凄一大壯観を!!』(一面)という宣伝文に併せて、水原秋櫻子「文武兼備の魂の輝き」、板垣直子「全人類の宝」、室生犀星「満点の頭脳」、谷川徹三「描写の立体性」、武田麟太郎「思考感情の美事な単純さ」といった『土と兵隊』批評(⇨『土と兵隊』讚)がレイアウトされている。これらの多くは、文芸時評として書かれたもので、それが単行本新聞広告に再利用されること、文学場内部の言表が、より広い読者に向けて発信されていくことにもなる。同様の批評を配置しながらも、広告「火野葦平著 土と兵隊」(『東京朝日新聞』昭一三・二二八)では、『数十万部の準備を以て火蓋を切つた本書配給陣発売即日にして脆くも潰滅! 全国書店よりの追加注文連日殺到!! 昼夜強行軍の増刷中!!!』(三面)といった、戦争のレトリックを流用した宣伝文も

みられる。増刷のタイミングにおいても、広告「火野葦平著 土と兵隊」(『読売新聞』昭一三・二二・一六)では、『麦と兵隊姉妹篇』ということを掲げつつ、『麦』と堂々並進/一億同胞の胸から胸を燃えぬけ灼き続ける感激の名作! / 炎の巨篇!! / 是ぞ東亜建設の聖旗の下怒濤とい征くみいくさの血と泥濘の戦列に建てられた聖戦日本の表忠塔だ!!』(二面)と国策イデオロギーに近接した宣伝文がみられる他、広告「火野葦平著 土と兵隊」(『東京朝日新聞』昭一三・二二・一七)では、『麦と兵隊』姉妹篇、『大増刷出来!!』という見出しにくわえ、『われわれの心臓を迫撃砲の迫力でぶち抜くもの「麦」に続いて独り「土」あるのみ曰く「〇と兵隊」曰く「×と兵隊」等々の群小流行語を尻目に、戦ふ兵隊の真の相をズバリと截ち割つて見せたのが本書だ!!』と、戦争文学として『土と兵隊』の魅力を積極的に打ちだしていく宣伝文もみられる。

月末になると、広告「火野葦平著 土と兵隊」(『東京朝日新聞』昭一三・二二・二四)において、『血と泥土の戦列に聖化されゆく人間性の頌歌』(一面)という宣伝文に、川端康成「国民皆読の文学」、豊島與志雄「土と兵隊」の特殊性が添えられる。そこで川端は、『火野葦平氏の「土と兵隊」が、国民皆読の文学である所以は、杭州湾敵前上陸とその後の進軍の戦記でありながら、それは同時に、日本民族が苦難を越えて発展して行く姿の、実に適切な象徴となつてゐるからである』と、『土と兵隊』を国民(皆読の)文学へと位置づけていく。『火野葦平氏の「土と兵隊』を『特異な戦争文学』だとみる豊島は『異常事が凡て日常事であり、また日常事が凡て異常事である』局面をとりだし、『全身的

な体験と責任とを持つた、平凡なやうで而も深い思惟」を探りあって、それを《日本の現はれ》、一面の現はれ》、《日支事変の聖戦たる特質の一面の現はれ》だと意味づけている。両者とも、『土と兵隊』とその書き手、そこに書かれた戦場の様相を、(当事者性、ヒューマニズムを備えた) 個別の体験であると同時に、銃後の国民が共有することで、聖戦へとつながり得る文学なのだと思味づけている。これが高じれば、《聖戦第三の新春、この国民の書を熱読して民族の決意を浄めよ》(広告「火野葦平著 土と兵隊」、『東京朝日新聞』昭一三・一二・三一、一面)と、わかりやすいイデオロギー装置として意味づけられることにもなる。

年が明けても、広告「火野葦平著『麦と兵隊』姉妹篇 土と兵隊」(『東京朝日新聞』昭一四・一・一五)では《天井しらずの人氣! 底なしの売行!》(一面)と謳われていく。ただし、新年からは『土と兵隊』をメインとした広告から、『麦と兵隊』と『土と兵隊』を並置したものへと明確にシフトしていく。紙面上も、左右対称に『麦と兵隊』(右)と『土と兵隊』(左)がレイアウトされ、中央に火野葦平の顔写真が配置されている。広告「火野葦平著 麦と兵隊/土と兵隊」(『読売新聞』昭一四・一・一三)では、右側(『麦と兵隊』)には《事変下出版界の無敵帝王篇!! 陣中文学の先駆!!!》と、左側(『土と兵隊』)には《日本の兵隊魂の最高表現!! 聖戦描写の絶嶺!!!》(三面)と宣伝文が添えられる。別バージョンとしては、広告「火野葦平著 麦と兵隊/土と兵隊」(『東京朝日新聞』昭一四・一・二七)において、右側(『麦と兵隊』)には《最初最高の聖戦実記! 世界戦争文学の王者!!》と、左側(『土と兵隊』)には《『麦』と堂々雁行する出版界の無敵部隊!!》

(三面)と宣伝文が付され、中央に《火野葦平著》の文字が配置される。あるいは、広告「火野葦平著 麦と兵隊/土と兵隊」(『読売新聞』昭一四・一・二四)ではこれを上(『麦と兵隊』)・下(『土と兵隊』)にレイアウトしたのもみられる。他にも、広告「火野葦平著 麦と兵隊/土と兵隊」(『読売新聞』昭一四・一・二九)では、《聖戦文学の最高峰・出版界の無敵部隊》という一文が上部に横書きでレイアウトされ、右側(『麦と兵隊』)に《聖戦記のトップを切り全日本を感動させ全世界に熱読される名作》、左側(『土と兵隊』)に《『麦』と堂々並進、疾風枯葉を捲いて聖戦文学の王座を争ふ巨篇》(二面)と、《麦/土》という文字を強調した広告「火野葦平著 麦と兵隊/土と兵隊」(『東京朝日新聞』昭一四・二・七)では、右側(『麦と兵隊』)に《徐州へ徐州へ一望千里の麦畑を兵隊は怒濤と進む民族精神の行進曲》、左側(『土と兵隊』)に《杭州湾の敵前上陸血と泥土の戦列に聖化されゆく兵隊の魂の発展史》(二面)と、それぞれ宣伝文が添えられる。

ここまでの新聞広告分析をまとめれば、『土と兵隊』は同時代評の延長線上において、戦場にいる文学者からの当事者性・ヒューマニズムを兼ね備えた戦争文学として紹介されるとともに、戦時下の国民文学として、また、当初から売れる本(『多くの国民が買うべき本)としてアピールされていたことが明らかになった。すでに、『麦と兵隊』現象以降、火野葦平・『麦と兵隊』・『土と兵隊』というトライアングルの連携は強力に作用しており、『土と兵隊』にも火野葦平『麦と兵隊』という含意は明らかだが、昭和一四年に入ると、その配置にも転換がみられた。

火野葦平による戦争文学として、『麦と兵隊』と『土と兵隊』が並置して、いわば火野文学を体現する二つの作品として、それぞれの役割分担がクリアにされていったのだ。その際には、『聖戦（文学）』という意味づけも強調され、『土と兵隊』は『麦と兵隊』と、（文化的価値としても紙面配置としても）並んで、国民文学として位置づけられていったのだ。

以上、火野葦平による初出「土と兵隊」、単行本『土と兵隊』をめぐる同時代言説の分析から明らかになったことを簡潔にまとめておく。火野葦平『麦と兵隊』現象を受けて、昭和十三年に発表された「土と兵隊」は前作の延長線上で高く評価されつつ、はやい段階からその社会的意義（『文学の力』）が文学場内部から積極的に発信され、文学（者）の社会的有用性を担保・アピールする実践―作品としての役割を担いつつ、単行本化された『土と兵隊』―広告に付されていく言表の効果も相俟って、戦争文学の傑作という評価にとどまらず、聖戦下の国民文学として『麦と兵隊』と相補的な関係結びつつ、昭和一三―一四年をまたいで広く国民に、戦場にいる文学者¹⁰からのメッセージを発信していった。

次の課題は、「兵隊三部作」第三作の新聞小説、火野葦平「花と兵隊」（『東京朝日新聞』昭一三・一二・二〇）昭一四・六・二四夕／『大阪朝日新聞』昭一三・一二・二〇）昭一四・六・二七夕（休載含、全一三〇回、挿絵＝中村研一）の検討である。

注

- (1) 火野葦平「解説」『火野葦平選集 第二巻』東京創元社、昭三三、四二四、四二五頁。
- (2) 水谷昭夫「戦後文芸の対位者たち―火野葦平「土と兵隊」―「麦と兵隊」をめぐる―」（『日本文芸研究』昭四二・六）。
- (3) 矢野貫一「戦後版「麦と兵隊」「土と兵隊」補訂に関する存疑」（『無差』平七・三）、長野秀樹「具体的な現実」の諸相―兵隊三部作論（『敍説』平八・八）他参照。
- (4) 池田浩士「火野葦平論『海外進出文学』論・第一部」（インパクト出版会、平二二）、五四八頁。
- (5) 成田龍一「増補（歴史）はいかに語られるか 1930年代「国民の物語」批判」（ちくま学芸文庫、平二二）、一六〇頁。
- (6) 注（5）に同じ、一六四、一六五頁。
- (7) 増田周子「火野葦平「土と兵隊」研究―記録の検証と表象の問題―」（増田周子編著『戦争の記録と表象―日本・アジア・ヨーロッパ―』関西大学出版部、平二五）、五一頁。
- (8) 拙論「昭和一二年の報告文学言説―尾崎士郎「悲風千里」を視座として」（同『昭和一〇年代の文学場を考える 新人・太宰治・戦争文学』立教大学出版会、平二七）、三九五頁。
- (9) 注（8）に同じ、四〇三―四〇四頁。
- (10) 拙論「戦場にいる文学者」からのメッセージ―火野葦平「麦と兵隊」（同『昭和一〇年代の文学場を考える 新人・太宰治・戦争文学』前掲、四二七頁。なお、丸囲み数字は、原著で引用した同時代評に付した符号である）。
- (11) 菊池寛・横光利一「火野葦平と語る3兵隊の不満」（『東京朝日新聞』昭一四・一一・二二）で火野葦平は、『私が一個の兵隊の気持で書いたのは「土と兵隊」です。あれは分隊長として書いたのですが、出た当時は、一字一句、本当のことばかりだ

といふやうなことで、いろいろいはれたんですけれど、造つた話も大部入つてゐるのです、余りいふと怒られるかも知れませんが……(五面)と語っている。

(12) 報告文学(言説)における《眼》については、拙論『北支物権・「従軍五十日」の同時代評価——岸田國士の昭和一〇年代を考へるために』(『立教大学日本文学』平二七・一)参照。

(13) ペン部隊については、櫻本富雄「文化人たちの大東亜戦争 P K 部隊が行く」(青木書店、平五)、五味湖典嗣「文学・メディア・思想戦——「従軍ペン部隊」の歴史的意義——」(『大妻国文』平二六・三)、拙論「従軍ペン部隊言説と尾崎士郎「ある従軍部隊」」(『信州大学人文科学論集』平二八・三予)参照。

(14) 他に、『戦争と兵士との本当の姿を知らうとするものには一つの疑問を感じさせないか』と「土と兵隊」に疑義を示した田辺耕一郎は「火野葦平の文学」(『中外商業新報』昭一三・二二・二五)で、『火野葦平の文学は、つまり戦争を歌つてゐる』(五面)と難じている。また、柴田賢次郎は「戦争文学について」(『三田文学』昭一五・四)で、『私も戦線にゐて土と兵隊までを読んだ実によい戦争文学であると思ふが、一般から歓迎されたほど戦線では喜ばれてゐなかつたやうである』として、『常時も火線の中にある第一線の兵の言ひ分』として、『彼等は麦と兵隊、土と兵隊を生ぬるイルポルタージユくらひにしか思つてゐない』という声を紹介し、『無理のない正しい批判』(一五〇頁)と評している。

(15) 蒲豊彦は「一九三八年の漢口(四)——火野葦平と石川達三」(『言語文化論叢(京都橋大学)』平二三・九)で、石川達三『生きてゐる兵隊』と『麦と兵隊』が『いづれも精神総動員の一助』(三〇頁)となつたことを指摘しているが、時期を考慮すればなおのこと、火野については『土と兵隊』が果たした

役割も見逃すべきではない。

(16) 『麦と兵隊』時には展開されなかつたメディア・ミックスとして、『土と兵隊』は映画化された。布村建「フィルム温故知新(3)ドキュメンタリーとして見る『土と兵隊』——田坂具隆は何を描いたか」(『映画論叢』平二二・一一)参照。

※原則として、初出の「土と兵隊」は一重括弧、単行本は二重括弧表記として区別した。

※本研究は JSPS 科研費 15K02243 の助成を受けたものです。
(まつもとかつや・信州大学准教授)